軍記『保元物語』の世界

―半井本『保元物語』と『愚管抄』との比較を中心に―

橋口晋作

軍記は、言うまでもなく歴史上にあった合戦を取り上げた作品である。中世前期には、この軍記の代表的な作品が次々とうまれたのであるが、その、歴史上の最初の合戦、保元の乱を対象とした作品が『保元物語』である。本稿では改めて、この『保元物語』がどのような特徴をもった作品であるかということについて、史論書と言われる慈円の『愚管抄』と比較して、具体的に考察してみたい。

保元の乱が勃発した時、久寿二（一一五五）年生まれの慈円は僅かに二歳に過ぎなかった。『愚管抄』の保元の乱関係記事は、承久二（一二二〇）年六十五歳の慈円が、六十四年前の事件について調べ上げた記録、考察である。一方の『保元物語』の成立の現段階での上限は、『六代勝事記』の成立時、『愚管抄』の成立の数年後、貞応二（一二二三）年と考えられている。[1]

『保元物語』は、摂関政治を是とする史論書『愚管抄』が、その根本原因を院政という政治形態に、また直接の理由を「世ヲシロシメス太上天皇ト、攝籙臣ノヲヤノサキノ關白殿、トモニ、アニヲニクミテヲトヽヲカタヒキ給」たことに見ながら、その複雑な経緯を論じて行くのに対して、合戦の有様や敗者に訪れた厳しい運命を、華々しく或いは涙を誘うように描き上げている。本稿は、『愚管抄』と対照することによって、その違いをはっきりさせ、軍記というものの特徴を明らかにするのが目的である。

考察は、最初に『愚管抄』が保元の乱をどのように捉えているかを述べ、[2]次ぎにこの『愚管抄』の記述の仕方に対して『保元物語』がどのように対応し、異なっているかを考察して行くという方法をとる。

軍記の常（特徴）として『保元物語』も多様な異本群を擁しているのであるが、本稿ではその中から半井本を取り上げることとする。[3]それは、半井本が、「『保元物語』の本質的な理解の多くが半井本を通すことでなされうる」と見なされ、[4]筆者もまた、この本に他の諸本にない「乱の全体を示そう」という素朴な姿勢を認めるから[5]である。

『愚管抄』の描く保元の乱

『愚管抄』の巻第四の後半、保元の乱に筆が及ぼうとするところで慈円は「保元元年七月二日、鳥羽院ウセサセ給テ後、日本國ノ亂逆ト云コトハヲコリテ後ムサノ世ニナリニケルナリ」と言い切り、続けて「コノ次第ノコトハリヲ、コレハセンニ思テカキヲキ侍ナリ」と記している。皇室と摂関家の「魚水合體ノ禮」によって天下が治まることになっていると考える慈円にとって、この乱の勃発は大きな思考上の課題だったのである。

慈円は、保元の乱の根ざしを「後三條院ノ宇治殿ヲ心ヱズオボシメシケル」ことに置いている。後三条天皇の時代に皇室と摂関家の「魚水合體」の関係に罅が入り、「ヲリヰノミカドノ世ヲシロシメス」時代、院政期が

始まろうとしたというのである。しかし、後三条天皇の時代は「王・臣トモニハナレタルコトハナ」く、問題はなかった。慈円は、後三条天皇の時代については、根ざしを指摘するに止め、僅か三文で切り上げる。

院政期に時代が進んで、白河院政の時、高陽院泰子の入内をめぐって時の関白知足院忠実が罷免、閉門させられる。それは、娘泰子の鳥羽天皇への立后のことで、関白忠実と白河上皇の間が縺れてしまっていたからであるが、また、この入内を上皇が参詣していた「クマノヘアシザマニ人申タリケル」ためでもあったと記している。上皇は、左大臣花山院家忠を次の関白に据えようとして、近臣顕隆に相談したという。しかし、顕隆が同意せず、上皇は、仕方なく忠実の長男忠通をその後任の関白に任じる。その時、上皇は「ヲヤハヲヤ、コハコトコソハ、ゲスモイフメレバ、」と伝え、親子の人倫を無視しようとしたというが、忠通が「代々ノ例コノ職ハ父ノユヅリヲヱ候テウケトリ候夜、ヤガテ拝賀ナドスルコトニテ候ヲ、タガヘズシ候ハヾヤ。職ニ居候バカリニテ、父ノ勅勘ヱ申免ゼズ候ハンモ、不孝ノ身ニナリ候ハヾ佛神ノ御トガメモヤ候ベカラン」と、人倫を説いて懇願したので、上皇も忠通の返事に感動して、前関白忠実の勅勘を解いたという。摂関家の危機を何とか乗り越えた忠通は、関白の任務に励む。しかし、慈円は、「白河院ノ後、ヒシト太上天皇ノ御心ノホカニ、臣下トイフモノ、センニタツ事ノナク」と、摂関家の権限が大幅に縮小し、時代が変わったことを認めている。また、「別ニ院ノ近臣ト云物ノ、男女ニツケテイデキヌレバ、ソレガ中ニイテ、イカニモ〳〵コノ王臣ノ御中ヲアシク申ナリ」と批判する。ただ、摂政・関白は「カナシウヲサレテソレニハヾカリナガラ、又昔ノスヱハサスガニツヨクノコリテ、鳥羽・後白河ノハジメ法性寺ドノマデハアリケリトミユ」と述べている。そして、「白河院ノ、知足院ドノヲヒシト中アシクモテナシテヲヒコメテ、ソノ知足院ノ子法性寺殿ヲ別ニトリハナツヤウニツカヒタテサセ給タル」ことは「御ヒガ事」と断じ、「ヒシト世ヲバウシナイツルニテ侍ナリ」と指弾して、武者の世に陥らせた遠因を白河上皇の道理を無視した政治姿勢に置いているのである。この白河院政期については、慈円は、日本古典文學大系の本文で五十六行（三頁半）を費やしている。

鳥羽院政期は、白河上皇に疎外された知足院忠実の積極的な鳥羽上皇接近記事ではじまる。忠実は、白河上皇没後にやっと泰子を入内させ、本意を遂げる。しかし、高陽院泰子は皇子を産むことは出来ず、崇徳天皇も後白河天皇も閑院の出の待賢門院の皇子であった。忠実は、天承二年に朝廷に最後の出仕を願い出て、元日の拝礼を行った。それは、摂関家忠実一家の大勢力振りを見せつけるものであった。さて、この忠実の次男左大臣頼長は、「日本第一大學生」で、父最愛の息子であった。この頼長が関白、内覧の臣を望んでいたので、忠実が兄法性寺殿忠通に関白・内覧を譲るよう促したが、忠通は聞き入れなかった。忠実は憤って、強引に藤氏長者を頼長に渡し、一方では、鳥羽上皇を動かして、頼長を二人目の内覧の臣に据えた。このように摂関家の兄忠通と、父忠実の後押しを受ける弟頼長との間に対立が生じて来た頃、皇室の方でも似たような対立が生まれて

しまった。鳥羽上皇の当時の愛妃美福門院に皇子が産まれたが、この皇子を崇徳天皇妃皇嘉門院の子として、皇嘉門院の父忠通が大切に養育していた。妃の父、関白忠通に促されて、崇徳天皇は子としての近衛天皇に譲位したのであったが、即位の宣命には皇太弟と記されていたので、崇徳上皇は騙された、と憤った。近衛天皇の時代、頼長は内覧の臣、左大臣として華々しく活動した。忠通の方は、父忠実のなすに任せ、形ばかりの摂政・内覧の臣としてそのまま出仕していた。権勢を手にした頼長は悪左府と恐れられていたが、取るに足らないことで鳥羽法皇の近臣中納言家成の家を追補したりして、鳥羽法皇に疎まれてしまった。そのうちに近衛天皇が崩御した。世間は頼長が呪詛したと言い、鳥羽法皇もそう信ずるに至っていた。近衛天皇崩御後、頼長は内覧を外された。鳥羽法皇は、近衛天皇の後の天皇を誰にするか決しかねていた。その時、法皇は是非にと関白忠通の意見を懇請した。そこで、忠通は、先ずは二十九歳になる雅仁親王を天皇にして、その後次の天皇を考えるよう提案した。こうして、後白河天皇が出現した。知足院殿忠実も鳥羽法皇も「トモニ、アニヲニクミテヲト、ヲカタヒキ給テ、カヽル世中ノ最大事ヲオコナワレ」たのであったが、鳥羽法皇の存生中は内乱は起こらなかった。病床に伏すようになった鳥羽法皇は、内大臣宗能の進言を容れ、美福門院を母后とし、後白河天皇を中心にした政治体制を堅持するよう遺言してなくなった。鳥羽院政期は、法皇崩御の日、駆けつけた崇徳上皇が取り次がれず、騒動が起こったという逸話を記して終わる。この鳥羽院政期は、白河院政期の二倍以上の百三十四行を使って記述されている。保元の乱直前の時代なので、著者慈円が特に力を入れて、詳しく記したものと見られる。

保元の乱の記述は、七月九日の崇徳上皇の鳥羽田中殿から白河桟敷殿への移居から始まる。崇徳上皇の動きに対して、後白河天皇方は、関白忠通を始めとする公卿が集まり、誓文を提出していた武士を招集して、内裏を固めた。次いで、後白河天皇方は、宇治にいた悪左府頼長が白河に出て来るのを途中で討とうとしたが、失敗してしまった。崇徳上皇方は、頼長が合流すると、先ず源為義を呼び寄せた。為義は、子頼賢、為朝を引き連れて参上した。内裏では、為義の嫡男義朝が、崇徳上皇の御所に押し寄せて、追い散らすよう提案していた。天皇の乳母夫信西も決断を促したが、関白忠通は十日中は決定を下さなかった。十一日の暁、終に忠通が上皇方を追い散らすよう命ずると、義朝は大変に喜んで、平清盛達と手分けして、崇徳上皇の御所に押し寄せた。一方、崇徳上皇方では、為義が無勢と見て、取りあえず宇治、或いは近江国、更には関東への退却を進言していた。しかし、頼長がこの進言を退け、暫く待てと命じたので、為義達は御所の庭で待機していた。そこに義朝達、後白河天皇方の武士が押し寄せた。頼賢、為朝は、義朝の郎等鎌田正清を何回も撃退したが、天皇方は大勢なので、御所を取り囲んで、火を懸けた。崇徳上皇は、馬に乗せられて、仁和寺の覚性法親王の元に身を寄せた。左大臣頼長は、矢が当たってしまったので、従者が小舟に乗せて宇治に向かい、父知足院忠実にこの旨を告げたが、忠実は面会もしなかった。その後、頼長は死んでしまい、般若寺の近くで火

葬された。なお、頼長の死については、直接古老に聞いたのと違うところがあるので、「カヤウノ事ハ人ノウチ云ト、マサシクタヅネキクトハカハルコトニ侍リ」と、慈円は述べている。為義は義朝の許に逃げて来たが、勅定で義朝は父の首を切った。死罪は長く行われていなかったが、為義以下の武士に対して行われることになった。崇徳上皇は讃岐の国に流され、忠実は知足院に籠居させられた。保元の乱については源中納言雅頼が義朝の注進を記した日記が残ってい、太政官庁での上皇方宰相中将教長の審問も行われたと慈円は記している。以上の保元の乱についての『愚管抄』の記事は八十三行に上るが、合戦そのものについての記述は僅か一文（数行）に過ぎない。

半井本『保元物語』の世界と『愚管抄』

半井本は、「後白河院御即位ノ事」という章段に当たるところ（以下は章段名のみ記す）から始まる。この章段は、鳥羽上皇を称える記事で始まり、崇徳上皇の恨みが極まった後白河天皇の即位までを一気に語る。

『保元物語』は、鳥羽上皇の紹介とその治世を称える言葉で始まる。従って、『愚管抄』のように、保元の乱の根源を院政に求め、その院政の根ざしから語り始めるということはない。

目出度かった鳥羽院政に暗い影が差し出したのは、『愚管抄』と同様に崇徳天皇の近衛天皇への譲位である。但し、『愚管抄』では、崇徳天皇は関白忠通から后皇嘉門院の子という扱いだからと勧められて譲位したことになっていたが、半井本では、簡単に近衛天皇の誕生を「殊ニ悦ビヲボシメシ」た鳥羽上皇が、強引に「ヲシヲロシ奉」ったとしている。関白忠通には言及がなく、鳥羽上皇の美福門院への偏愛が浮き彫りになっている。半井本は、この件について、「一院新院父子ノ御中、不快ト聞エ」たと記しているが、『愚管抄』の「御意趣ニコモリケリ」よりも親子の対立を前面に押し出して明解である。

この後、半井本は、鳥羽上皇の出家を称える短い文章を置く。そして、それに続けて、後白河天皇の即位を、「新院御恨今一入ゾマサラセ給」た事件として畳み掛けて行く。『愚管抄』では、後白河天皇の即位についても、鳥羽法皇が「アニヲニクミテヲト、ヲカタヒキ給」たと評していることになるが、やはり即位の事情を語ることに主眼が置かれていて、崇徳上皇の恨みへの言及は特にない。後白河天皇の即位は、関白忠通の提言であったが、このことについて、慈円は「鳥羽院ハ最後ザマニヲボシメシシリケン、物ヲ法性寺殿ニ申アワセテ、ソノ申サル、マ、ニテ、後白河院位ニツケマイラセテ」と、評価する立場にあった。『愚管抄』によれば天皇の候補は、後白河天皇の外に三人あったとのことだが、半井本は、崇徳上皇に即して「重仁親王ハ、今度ハ位ニハ遁ジ物ヲ」と、重仁親王が最有力だったように記す。そして、美福門院が、「誠ノ親ナラヌ御隔」から後白河天皇を「モテナシ奉リ、法皇ニモ内〻コシラヘ申サセ給ケルトゾウケ給ル」と、崇徳上皇の恨みを美福門院に集中させて行く。半井本の語り手は崇徳上皇に同情しながら、保元の乱の起こりを語っているように見える。

上巻冒頭の「後白河院御即位ノ事」の後、半井本は、「法皇熊野御参詣并ビニ御託宣ノ事」・「法皇崩御ノ事」の二章段で、鳥羽法皇の崩御を語る。これは、全体として『愚管抄』と同じ運びである。半井本の「法皇熊野御参詣并ビニ御託宣ノ事」は、「愚管抄四に記される白河院熊野詣の折の挿話を虚構化したもの」[6]であろう。崩御の後は「世ノ中手ノウラヲカヘスガ如クナランズルゾ」という託宣があったと語られるが、半井本の「法皇崩御ノ事」は、「聖皇」鳥羽法皇の崩御を惜しみ、悲しむ記事のみ[7]で、世の乱れへの対策などは全く記されていない。これは、『愚管抄』とは対照的で、『愚管抄』の場合、鳥羽法皇崩御の場面は既に崩御後の世の中をどうするか、崇徳上皇のことで慌ただしい場面となっている（但し、対策などはそれぞれ半井本の後の章段に出て来るので、『保元物語』は単に、鳥羽院政期を平和な「聖代」として対照的に描こうとしているに過ぎない[8]と考えられる。）。

『愚管抄』では鳥羽法皇の崩御の後、直ぐに崇徳上皇の桟敷殿への移居となっているが、半井本は、ここに「新院御謀反思シ召シ立ツ事」・「官軍方〻手分ケノ事并ビニ親治生ケ捕ラルル事」・「新院御謀反露顕并ビニ調伏ノ事付ケタリ内府意見ノ事」の三つの章段を使っている。最初の「新院御謀反思シ召シ立ツ事」の冒頭と末尾には、『愚管抄』に記されていたような人々の世の成り行きを恐れる言動が記されている。「新院御謀反思シ召シ立ツ事」の冒頭の人々の不安に続くところと、次の「官軍方〻手分ケノ事并ビニ親治生ケ捕ラルル事」には、後白河天皇方による崇徳上皇方の捕縛が記されていて、崇徳上皇方の動きが次第に明白になって行く。但し、『保元物語』の語り手は、この間に崇徳上皇よりも後白河天皇方に立脚地を変えている風である[9]。「新院御謀反思シ召シ立ツ事」の三つ目に崇徳上皇の憤懣が記され、次いで『愚管抄』に記されているような法性寺殿忠通と悪左府頼長の対立が語られる。しかし、父忠実の「御計」で氏の長者、内覧の地位に就いたとは記されているが、『愚管抄』が強調する「アニヲニクミテヲト、ヲカタヒキ給」という父の偏愛は背景に退いて、兄弟の対立の面が強く押し出されている。頼長もまた、『愚管抄』以上に、政治家として有能な人物として紹介されている。そして、この兄弟の権力争いの中で、頼長と崇徳上皇とが結び付き、上皇は鳥羽殿を出る決意をする。『愚管抄』では「宇治ノ左府申カハシケム」と推測したところを、半井本は事実として描いたといってよかろう。半井本では、崇徳上皇方の武士が捕縛され、頼長による調伏が露顕して、頼長の肥前の国への配流が決定した事態の中で、崇徳上皇の白川の御所への移居となる。なお、『愚管抄』の記す頼長を途中で討とうという動きは、半井本には出て来ない。

『愚管抄』では頼長が崇徳上皇の御所に合流したところで為義が呼び出される場面となっているが、半井本ではここを「新院、為義ヲ召サルル事」・「左大臣殿上洛ノ事付ケタリ着到ノ事」・「新院御所各門〻固メノ事付ケタリ軍評定ノ事」の三つの章段で語る。『愚管抄』と大きく異なるところは、先ず合戦の指揮を要請された為義が辞退し、代官に推薦された為朝が作戦を述べることである。『愚管抄』では、義朝について、「嫡子ノヨシトモハ、

御方ニヒシト候ケリ。トシゴロノ父ノ中ヨカラズ」と記しているが、半井本の為義・義朝は互いになるだけ直接の合戦を避けたい風である。次ぎに、『愚管抄』の為義は一旦退却する策を言上したのであるが、半井本の為朝は夜討ちを提案していることである（為義の献策は、後の「主上三条殿ニ行幸ノ事付ケタリ官軍勢汰ヘノ事」に出て来る）。『愚管抄』では頼賢・為朝が並記されているのだが、『保元物語』では周知のように為朝が英雄的人物として描かれ、頼賢は名前が出る程度に過ぎない。半井本も、頼長が合流した後で軍評定が行われ、頼長が「主上、上皇ノ国ヲ論ジ給」う戦いと位置づけて、為朝の策を退けたことになっている。

後白河天皇方の軍評定は、「左大臣殿上洛ノ事付ケタリ着到ノ事」と「新院御所各門〻固メノ事付ケタリ軍評定ノ事」の間に置かれている「官軍召シ集メラルル事」と上巻末の「将軍塚鳴動并ビニ彗星出ヅル事」・「主上三条殿ニ行幸ノ事付ケタリ官軍勢汰ヘノ事」の三つの章段で語られる。「官軍召シ集メラルル事」に、『愚管抄』にも記されていた鳥羽法皇の遺言が出て来る。『愚管抄』には「武士為義、清盛ナド十人トカヤニ祭文ヲカ、セテ、美福門院ニマイラセラレニケリ」とだけあったのだが、半井本は、法皇自ら記された義朝・義康達と美福門院から「故院ノ御遺言ノ内ナリシカバ」と言って加えられた清盛・頼政達があったとしている。半井本は、一貫して美福門院を法皇の陰から政界を動かした女性として描いている。[10]「主上三条殿ニ行幸ノ事付ケタリ官軍勢汰ヘノ事」で『愚管抄』と大きく異なるのは、関白忠通への言及が全くないことである。義朝の作戦は、信西入道によって「武勇合戦ノ道ニヲヒテハ、一向汝ガ計タルベシ」と、義朝に一任される。『愚管抄』に記されていた為義の献策は、『愚管抄』の通りにここに記されてはいるが、「左大臣殿、為義ヲ召テ、閑ニ御問答アリケリ」と扱いが異なり、内容も「若又、此御所落サセ給程ナラバ」と限定されたものになっている。

後白河天皇方が攻め寄せて、崇徳上皇方が院の御所から敗退するまでを、中巻の前半「白河殿ヘ義朝夜討チニ寄セラルル事」・「白河殿攻メ落ス事」という長い章段で描く。『愚管抄』と異なるところは、「西ヘヨリタル門ヲバ、為朝一人」、西面の門を「為義父子六人シテ承ル」と周知のように為朝を巨人化し、後白河天皇方が為朝一人を持て余し、たじたじとなったように描いていることと、清盛率いる平家軍がその為朝と戦った場面を設けていることである。しかし、全体としては『愚管抄』のように源氏の義朝軍と為朝達の戦いとなっているし、「頼賢・タメトモ勢ズクナニテ、ヒシトサヘタリケルニハ、義朝ガ一ノラウドウ鎌田ノ次郎マサキヨハ、タビ〳〵カケカヘサレ」ということもその通りに描かれている。なお、崇徳上皇方が劣勢、敗勢となった原因は、左大臣頼長の判断の誤りにあったと『保元物語』は描いていて、「主上、上皇ノ国ヲ論ジ給」う戦いが「十廿騎ノ私事」のような夜討ちで決してしまう世界を明確に打ち出している。

敗戦後の崇徳上皇について、『愚管抄』は「新院ハ御ナヲシニテ御馬ニタテマツリテ、御馬ノシリニハムマノスケノブザネト云者ノリテ、仁和寺ノ御ムロノ宮ヱワタラセ給ヒケリ」と一文で済ませるが、半井本は、「新院、

左大臣殿落チ給フ事」・「新院如意山ニ逃ゲ給フ事」・「新院御出家ノ事」・「勅ヲ奉ジテ重成新院ヲ守護シ奉ル事」と四つの章段を使ってその逃避行を描く。如意山までは為義が守護していたが、仁和寺へはその守護の武士を捨て、輿で案内もせず押し入ったと描いている。

悪左府頼長の死については「新院、左大臣殿落チ給フ事」と中巻最後の章段「左府ノ御最後付ケタリ大相国御歎キノ事」の二章段が使われている。慈円は、筑後前司重定の話と「仲行ガ子」の話とを記しているが、馬より射落としたというところは重定の話に、父知足院殿忠実に告げられたところは「仲行ガ子」の話に拠っている。重定の報告を受けた法性寺殿忠通が「朝敵ヲ打タル者ハ世ニ有ゾ」と褒めたということや、下巻にある「左大臣殿ノ御死骸実験ノ事」などは『愚管抄』の語り得ないことであろう。「大相国御歎キノ事」には「哀レ摂政関白ヲモシテ、天下ノ事ヲ今一度取行ハンヲ見聞トコソ思シニ」という言葉があり、慈円の指摘した忠実の偏愛が仄見えているが、愛し子を失った、無力な父親の悲しみとして纏められている。

下巻は「謀反人各召シ捕ラルル事」で始まる。この巻は保元の乱の後日譚、合戦後の処理が語られるところとなっている。

『愚管抄』も記す為義の処刑は、「為義降参ノ事」・「為義最後ノ事」の二つの章段で語られる。『愚管抄』と異なるところは、この二章段の間に、清盛が「和讒ニ構テ」伯父を処刑する「忠正、家弘等誅セラルル事」を置いていることである。忠通が「朝敵ヲ打タル者ハ世ニ有ゾ」と褒めたというが、義朝には過酷な父の処刑が課されることになる。『愚管抄』では「トシゴロココノ父ノ中ヨカラズ」と紹介されていたが、半井本では、義朝は彼なりに父を助けようとしていたと読める。しかし、『保元物語』では主に、頼みにした子に処刑される父親、為義の立場から親子の恩愛の情が描かれる。為義処刑の後に記される「義朝ノ弟共誅セラルル事」・「義朝ノ幼少ノ弟悉ク失ハルル事」・「為義ノ北ノ方身ヲ投ゲ給フ事」は、『愚管抄』の全く触れない世界である。義朝の兄弟、その母を襲った過酷な運命と、それぞれの運命の受け入れ方を描いて、「朝敵」となることの恐ろしさ、親子・兄弟の恩愛の情を描くのが、下巻、源為義関係の記事の主題と見られる。

崇徳上皇については「重仁親王御出家ノ事」・「新院讃州ニ御遷幸ノ事」・「新院血ヲ以テ御経ノ奥ニ御誓状ノ事付ケタリ崩御ノ事」と、飛び飛びに関係記事が置かれている。『愚管抄』では、「新院ヲバサヌキノ國ヘナガシタテマツラレニケリ」ということが記されているだけであった。半井本は皇子重仁親王の出家や崇徳上皇の配所での崩御を語った後、西行法師の「ヨシヤ君昔ノ玉ノユカトテモカ、ラン後ハ何ニカハセン」の和歌で関係記事を閉じる。上皇の皇位への執着、それに一定の理解を示しながら、合戦によってより悲惨な境遇に陥った、その無念と空しさを描くことが『保元物語』崇徳上皇関係記事の主題と言えよう。[11]

悪左府頼長方については「左大臣殿ノ御死骸実検ノ事」・「左府ノ君達并ビニ謀反人各遠流ノ事」・「大相国御上洛ノ事」の三つの章段が「新院讃州ニ御遷幸ノ事」の前後に配されている。『愚管抄』は「宇治ノ入道ヲバ又

法性寺ノサタニテ、知足院ニウチコメラレニケリ」とのみあったが、そのことは、やはり「大相国御上洛ノ事」の末尾に「サレ共、終ニハ、知足院殿ヘゾ渡シ被進ケル」と添えられている。左大臣頼長の「死骸実検」などということは、慈円の記し得ない「ムサノ世」の姿であろう。前二つの章段には、祖父大相国忠実と孫の頼長の三人の遺児の嘆きを通して、大相国の無力が語られている。一方、「大相国御上洛ノ事」は、関白忠通の孝子振りを描き出している。『愚管抄』が、関白就任の場面で描き出していた忠通の孝子振りを、半井本がこの章段で用いたとも言えそうである。

軍記『保元物語』の世界

『保元物語』は上巻・中巻・下巻の三巻構成になっている。上巻は保元の乱の合戦が始まるまで、中巻は合戦の描写、下巻は乱後の処分という内容になっている。『愚管抄』の場合は、保元の乱の合戦の始まるまでが、合戦が始まってからその処分の終わるまでの二倍の行数を費やして説かれていた。しかも、合戦の描写に当たる部分は全体の一割にも満たない。「日本國ノ亂逆ト云コト」が起こって「ムサノ世」になってしまった「コトハリ」に重点のあった『愚管抄』に比べると、『保元物語』は、悪左府頼長の言葉によれば「主上、上皇ノ国ヲ論ジ給」た合戦の描写を中心に、この合戦がいかにして起こり、合戦の後関係者はどのようになったかをそれぞれ均分に描き、保元の乱の全体を描く作品になっている。

『保元物語』は、『愚管抄』が院政の根ざしから説き起こしているのに対して、乱直前の鳥羽天皇（上皇・法皇）時代を「聖代」して描き、これに対照させて、保元の合戦による世の乱れを浮き立たせるという方法を採っていると見られる。しかし、この『保元物語』の手法は、『愚管抄』の記述を完全に否定したものではない。それは、『愚管抄』が「マサシク王・臣ミヤコノ内ニテカヽル亂ハ鳥羽院ノ御トキマデハナシ」と記しているからである。『保元物語』は、『愚管抄』のこの視点に即して、鳥羽天皇（上皇・法皇）時代を「聖代聖皇ノ先規ニモタガハ」ぬ御代として対照させたと見ることが出来るのである。このように『保元物語』が『愚管抄』の捉え方を少しずらして描いている、と見ることが出来るものに、乱の原因となった皇室・摂関家内の対立がある。皇室について、『愚管抄』は関白忠通の絡まりに触れながら鳥羽法皇、崇徳上皇の対立を説いていたが、『保元物語』は寵姫美福門院を崇徳上皇の対立者に仕立てて描いていた。また、摂関家については、前関白忠実が「アニヲニクミテヲト、ヲカタヒキ給」たと明示せず、忠通・頼長兄弟の対立を前面に打ち出す方法を取っていた。従って、皇室・摂関家内の対立から保元の乱が勃発する経緯は、『愚管抄』と大同小異となっている。次に、保元の乱の合戦そのものも、全体としては源氏の義朝と為朝達の戦いになっている。これも、『愚管抄』の把握とそれ程の隔たりはなさそうに見える。頼賢・為朝が鎌田正清を「カケカヘ」したということは、その通りに『保元物語』も描いている。勝敗が決した後の、崇徳上皇・左大臣頼長・前関白忠実・源為義の運命も、詳簡の差が相当にあるが、肝心のところは一致している。特に、頼長の最期は慈円が故老に

尋ね聞いた真相を交えた記述になっている。以上のように、『保元物語』は、保元の乱の全体像においては、『愚管抄』の記述を踏まえて描いていると みることも出来る作品なのである。

それでは、内容上『愚管抄』と大きく異なるところはどこであろうか。第一に挙げるべきは、言うまでもなく為朝を合戦の主役にしていることである。『愚管抄』における合戦の主役は義朝であり、崇徳上皇方の中心も為義であった。敗者方の若武者為朝を一騎当千の武士に仕立てて、その晴れやかな合戦の手並みと悲劇的な生涯を描いているのが、軍記『保元物語』の特徴である。このことに関わって、乱の合戦を描く「白河殿へ義朝夜討チニ寄セラルル事」・「白河殿攻メ落ス事」や、為朝の最期を描く「為朝鬼島ニ渡ル事并ビニ最後ノ事」といった章段は、『保元物語』中最も長大なものとなっている。次ぎに、敗者側の父親、源為義や知足院忠実が子供への思いを語る場面を設けたり、子供の義朝や忠通も敵味方を超えて親への情愛を示す場面が描かれたりしていることである。[12] このような乱を通しての親子・兄弟の恩愛の情の描出には、『愚管抄』の記述を踏まえたものも見られるが、その質が大きく異なっていると感じられる。特に、敗者側の運命で下巻のほぼ一巻、全体の三分一を占めるように構成したのは、恩愛の情を聴衆と分かち合うことを狙いとしたものに違いない。また、この共感の世界へは、「違勅ノ者」となってしまうことへの恐れが、義朝像を通して流れ込んでいるが、それは勝敗に運命を託す武士層にそれなりに納得されるものとなっているように思われる。

慈円は皇室と摂関家の「魚水合體ノ禮」によって天下が治まると考えていたのであるが、『保元物語』は関白忠通に殆ど関心を払わず、悪左府頼長が「十廿騎ノ私事」の作法に過ぎないと言って退けた夜討ちによって、「主上、上皇ノ国ヲ論ジ給」う戦いが決着してしまい、「筑紫八郎」という「冠者」が主役を演じているところに、軍記としての『保元物語』の面目があるといえよう。

注

(1) 栃木孝惟「保元物語　解説」(新日本古典文学大系『保元物語　平治物語　承久記』平成一二年七月)。

(2) 『愚管抄』本文は日本古典文學大系版によった。

(3) 半井本『保元物語』本文は(1)の新日本古典文学大系版によった。

(4) 安藤淑江「『保元物語』研究の現在と課題」(軍記文学研究叢書『保元物語』平成九年七月)。

(5) 拙稿「『保元物語』の父と子」(『人文』平成一九年八月)。

(6) (1)「保元物語」の脚注(栃木氏担当)。

(7) 野中哲照「『保元物語』における〈鳥羽院聖代〉の演出—美福門院の機能をめぐって—」(『国文学研究』平成六年六月)にこのところが美福門院からの記述になっているという指摘がある。。

(8) (7)の論考で野中氏も「語り手の表現(演出)方法」と捉えている。

(9) 平野さつき「半井本『保元物語』における王権の問題」(『国文学研究』

平成三年三月）で、平野氏は「喪中に行動を起こすこと」が契機になっていると指摘されている。

（10）（7）の論考で野中氏も、一貫して崇徳上皇の恨みが美福門院に向けられるよう配慮されているという見方をされている。

（11）この中には崇徳上皇の怨霊化の問題もあるが、このことについては作品中に具体的に描かれ、多くの論考もあるので割愛した。

（12）このことについては（5）の拙稿で取り上げた。

（平成二十年五月十二日　受理）